

音楽と笑顔で心をつなぐ 真のバリアフリーを実現したい

2013年秋、「スポーツ祭東京2013」(第68回国民体育大会・第13回全国障害者スポーツ大会)が都内全域で行われました。味の素スタジアムで開催された両大会の開会式で演奏を披露した、ヴァイオリニストの増田太郎さんは、幼少期から青年期を三鷹市で過ごされました。

今年の新春対談では開会式の会場となった味の素スタジアムに増田さんをお迎えし、開会式でのエピソードや三鷹市での思い出、音楽との出会い、そして東日本大震災の被災地での復興支援活動についてお聞きするとともに、20歳で視力をなくされたという立場から三鷹市が取り組むバリアフリーについても語り合いました。



増田太郎さん × 清原慶子市長 (ヴァイオリニスト)



誰もがみんな人生の挑戦者

清原 「スポーツ祭東京2013」では、国民体育大会と全国障害者スポーツ大会のそれぞれの開会式で演奏されました。どのようにお感じになりましたか。

増田 二つの大会を「スポーツ祭東京2013」という一つの大会として開催する趣旨に感銘を受けましたし、両大会の開会式で演奏させていただいたことはとても光栄でした。

清原 私は、三鷹市の実行委員会会長として両大会の開会式に出席しましたが、増田さんがソロを弾かれていた姿がステージ両脇の大型ビジョンに大きく映し出されていました。何万人もの人々が集中して、増田さんの演奏に聴き入っている一体感に感動的でした。

増田 ありがとうございます。ほかの演奏家はロックやサンバなど大人数でしたが、僕のパートナーだけピアノとヴァイオリンのソロでした。素晴らしい舞台を用意していただいたと思います。

清原 さらに、全国障害者スポーツ大会では開会式に加えて、府中市の少年少女合唱団とのミニコンサートにも出演されましたね。今回の演奏にどんな想いを込められましたか。

増田 出演の依頼を受けたとき、新曲を書き下ろそうと決めました。日ごろからアスリートたちを支え、励ましている人々が必ずいます。さらには、この瞬間に、さまざまな場所で懸命に挑んでいる人々があります。そのすべての人々にささげる歌をつくりたいと思いました。

清原 それが「君は挑む、その先の未来へ」という曲ですね。歌詞も、メロディーも、歌声も、演奏も本当に素晴らしかったです。



清原慶子市長 Keiko Kiyohara

昭和26(1951)年生まれ。慶応義塾大学、同大大学院で学んだ後、ルーテル学院大学文学部教授、東京工科大学メディア学部教授・学部長を経て、平成15(2003)年4月に第6代三鷹市長に就任(現在3期目)。内閣府「子ども・子育て会議」、厚生労働省「社会保障審議会障害者部会」、国土交通省「国土審議会」をはじめ、内閣官房、総務省などの審議会等の委員や東京都市長会監事、公益財団法人徳間記念アニメーション文化財団副理事長、株式会社東京スタジアム取締役などを務める。「市民参加と協働」「行財政改革」の二つを市政の基礎に位置付け、「都市再生」と「コミュニティ創生」を最重点とした高環境・高福祉のまちづくりを推進している。

増田 清原市長にも演奏を聴いていただけたことはうれしかったですね。この曲は、「挑む」生きるテーマです。エンディングでは「ともに生きる」というメッセージに結実させることに心を砕きました。

清原 増田さんは視覚に障がいがありますが、全国障害者スポーツ大会での演奏には格別な想いがありましたか。

増田 僕にとっては、目が見える、見えないということよりも、すべての人が挑戦者であるということが大切です。開会式のときに、「すべての人がアスリートだ」というメッセージがありました。誰もがみんな人生の挑戦者である。そこがスタートラインであることを強く意識させてくれた大会でした。

5歳から始めたヴァイオリン 学んだことはすべてつながっている

清原 三鷹のご縁はいつからですか。

増田 住むようになったのは小学2年生からです。市内の明星学園で小学1年生から高校まで学びました。

清原 どんな子ども時代でしたか。

増田 僕は生まれつき弱視でした。でも、クラスメイトとは、放課後に野球や音楽、そして自転車に乗って走り回って遊んでいました。

清原 どこで遊んでいたのですか。

増田 やっぱり井の頭公園ですね。くまなく遊び回りましたよ。

清原 お友達と一緒に、元気に過ごされたんですね。

増田 高校を卒業した10代の終わりに視力が急に落ちてしまい、明暗を感じる程度のところまで落ちました。でも、明星学園の友達はずっと変わらずに僕に接してくれました。

清原 お友達やご家族の対応が変わらなかったのは大きいことだったんですね。

葉以上のコミュニケーションツールになっていた。相手と響き合うことができました。音楽という手段を自分が持っていたのは本当にラッキーでした。

清原 ところで、ヴァイオリンと出会われたのはいつでしたか。

増田 5歳のときです。

清原 きっかけは何だったのですか。

増田 僕の父はギターを弾いて、歌うのがとても得意でした。幼い頃から父を見ていて、とても憧れていました。5歳のときに「僕もギターが弾きたい」と両親にねだりました。両親は僕にクラシック音楽を学ばせたいと思っていたので、「ギターを弾くには、ヴァイオリンを弾けるようにならないといけないんだよ」と言ったのです。僕は「うん、わかった」と素直にヴァイオリンを学び始めました。

清原 ヴァイオリンを学び始めたことは、後に音楽家となる増田さんにとって、今思えば大切な出来事だったんですね。

増田 中学生になると友達とバンドを組もうということになり、ギターを弾き始めたんです。すると、父が言っていた通り、すぐに弾けるようになりました。

清原 お父さんのおっしゃっていたことは真理だったんですね。

増田 僕は高校を卒業して、松任谷正隆さんの主宰する音楽の専門学校でアレンジの勉強をしました。そこでもヴァイオリンを学んだことは役に立ちましたね。やってきたことはすべてつながっている、そう思いました。

清原 好きな音楽家は誰ですか。

増田 ステファン・グラッペリというフランスのジャズ・ヴァイオリニストです。彼と出会ったことで、ヴァイオリンってこんなに自由に弾いていいんだと感じました。すでに亡くなられましたが、一度だけ直接お目にかかり、お話しをすることができました。

清原 会話の中で何かメッセージは受け止められましたか。